日置荘遺跡（その１）現地説明会資料

昭和63年２月20日

大　阪　府　教　育　委　員　会
財団法人　大阪文化財センター

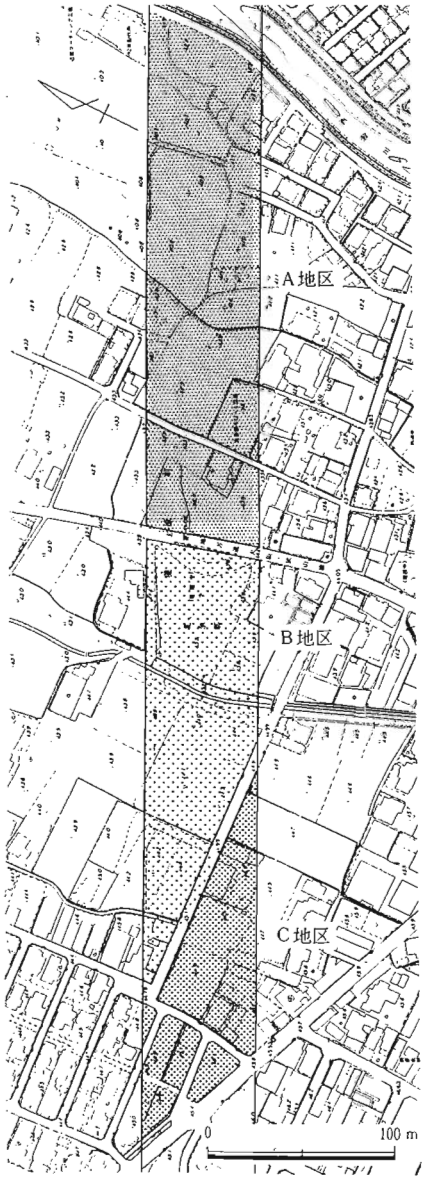
はじめに

大阪府教育委員会と㈶大阪文化財センターでは、近畿自動車道和歌山線の建設に伴って、昨年４月より南河内郡美原町北余部から堺市日置荘西町にかけて所在する、日置荘遺跡の発掘調査を行っています。今回報告する（その１）調査区は、遺跡の東端部にあたります。

（その１）調査区は、西除川の西側の段丘上に位置しています。西除川に沿ってほぼ南北に走る下高野街道が調査区を横切って、大饗・北余部・南余部・北野田などの集落を通っています。

「日置荘」という地名は、平安時代から室町時代にかけて存在した奈良興福寺の荘園（日置荘）に由来するものとされています。また、「余部」という地名は、奈良時代の記録に出てくる余戸郷にちなむものとされていますが、いつごろ南北に分かれたのかわかっていません。この地域は、中世に全国的に活躍した河内鋳物師（鍋や釜、燈籠、梵鐘などの鋳物を生産した人々）の本拠地として知られています。

周辺にはいくつかの遺跡があります。大饗には南北朝時代の城岸寺城跡があり、北野田にも同時期の野田城跡があります。黒姫山古墳の東側に広がる真福寺遺跡では、河内鋳物師に関連すると思われる中世の梵鐘を鋳造した施設の跡などがみつかっています。西除川をはさんで対岸に広がる太井遺跡では、古墳群や奈良時代の掘立柱建物群、銅製品を鋳造したと思われる施設の跡などがみつかっています。また、日置荘遺跡（その３）調査区では、古墳時代の須恵器窯跡が発掘調査されています。



日置荘遺跡（その１）調査区配置図

1．大保遺跡　3．黒姫山古墳　15．真福寺遺跡　17．太井遺跡　24．城岸寺城(大饗城)跡
18．日置荘遺跡(余部遺跡)　184．日置荘遺跡　185．野田城跡　231．日置荘西町遺跡

周辺の遺跡（1：20,000）

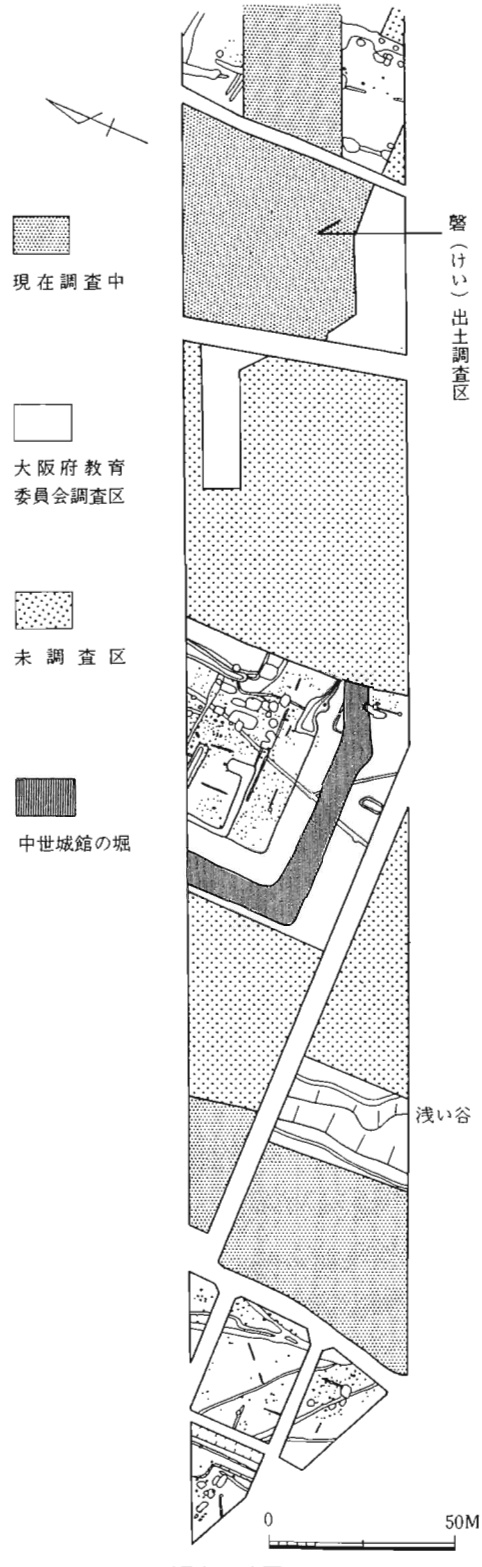
これまでの調査成果

これまでにA地区とC地区の一部の調査が終わっています。簡単に紹介しておきます。

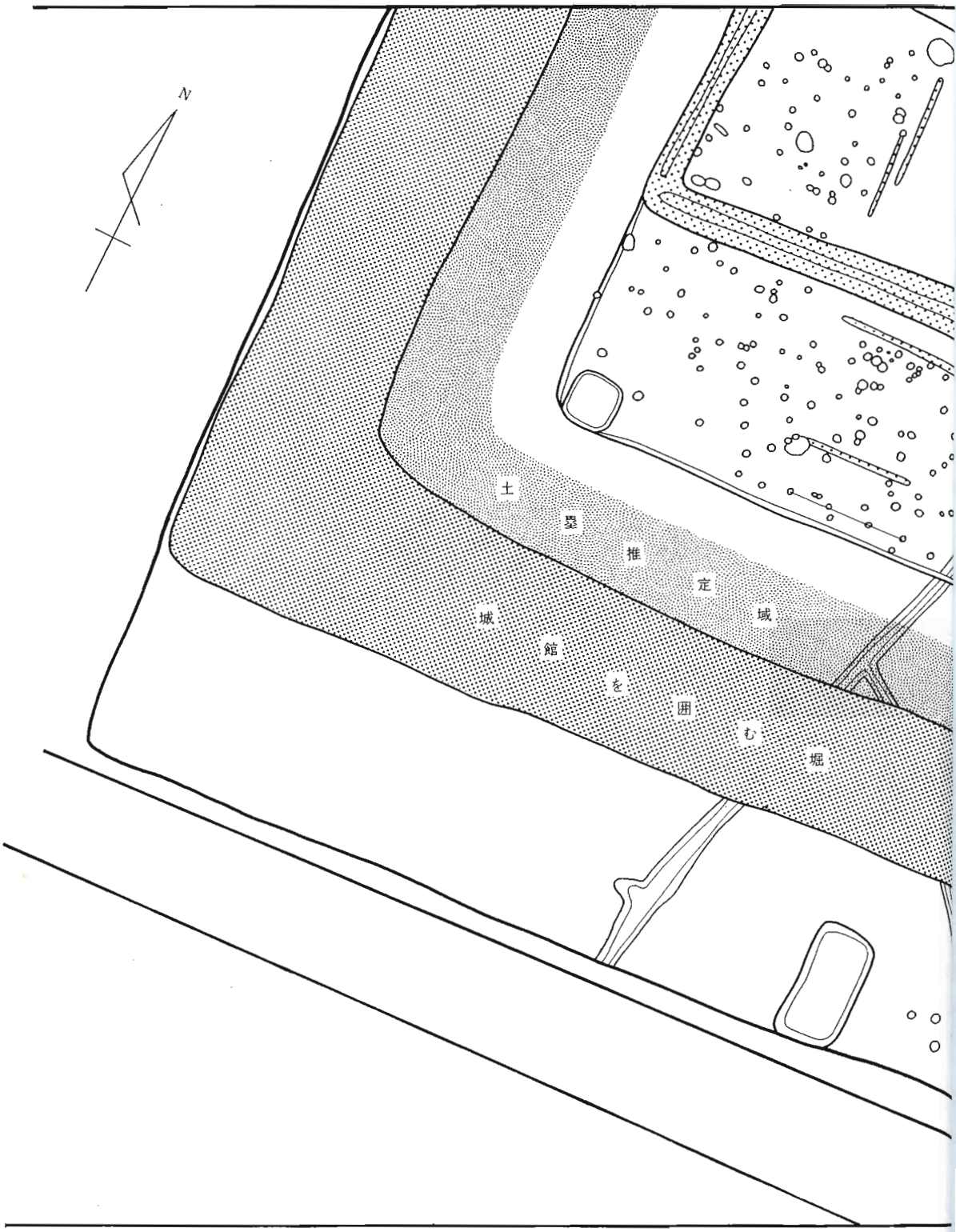
A地区では、西除川の西岸で古墳時代の土器が大量に検出されました。特に須恵器（すえき）（窯で焼かれた青灰色の硬質の土器で、古墳時代中期から日本で作られるようになりました）が大部分で、ゆるい斜面に一面に広がっていました。同じ時期の掘立柱建物が検出されていますが、建物群の規模に比べてはるかに土器の量が多いので、普通の生活で捨てただけとは考えられません。焼き具合の良くないものや、焼き歪みのあるものもみられます。泉北ニュータウンや狭山池のあたりに多くの須恵器の窯があることから、窯からの製品を集める集団がこの場所に住んでいたのかもしれません。また、普通の大きさの２倍もある須恵器がみつかっており、ほかの多くの土器とは異なっていることから、なにか特別の祭に使われたものと考えられます。

C地区では、府道美原泉大津線の東側で13世紀末～14世紀頃の掘立柱建物群や溝、土器や石などを捨てた穴〔土坑（どこう）〕などが検出されました。柱穴の中には、底に石や瓦を敷いたものが多くみられ、当時の柱が腐らずに残っていたものもありました。柱穴は狭い範囲に多く検出されていることから、掘立柱建物を何度も建て替えたと考えられます。

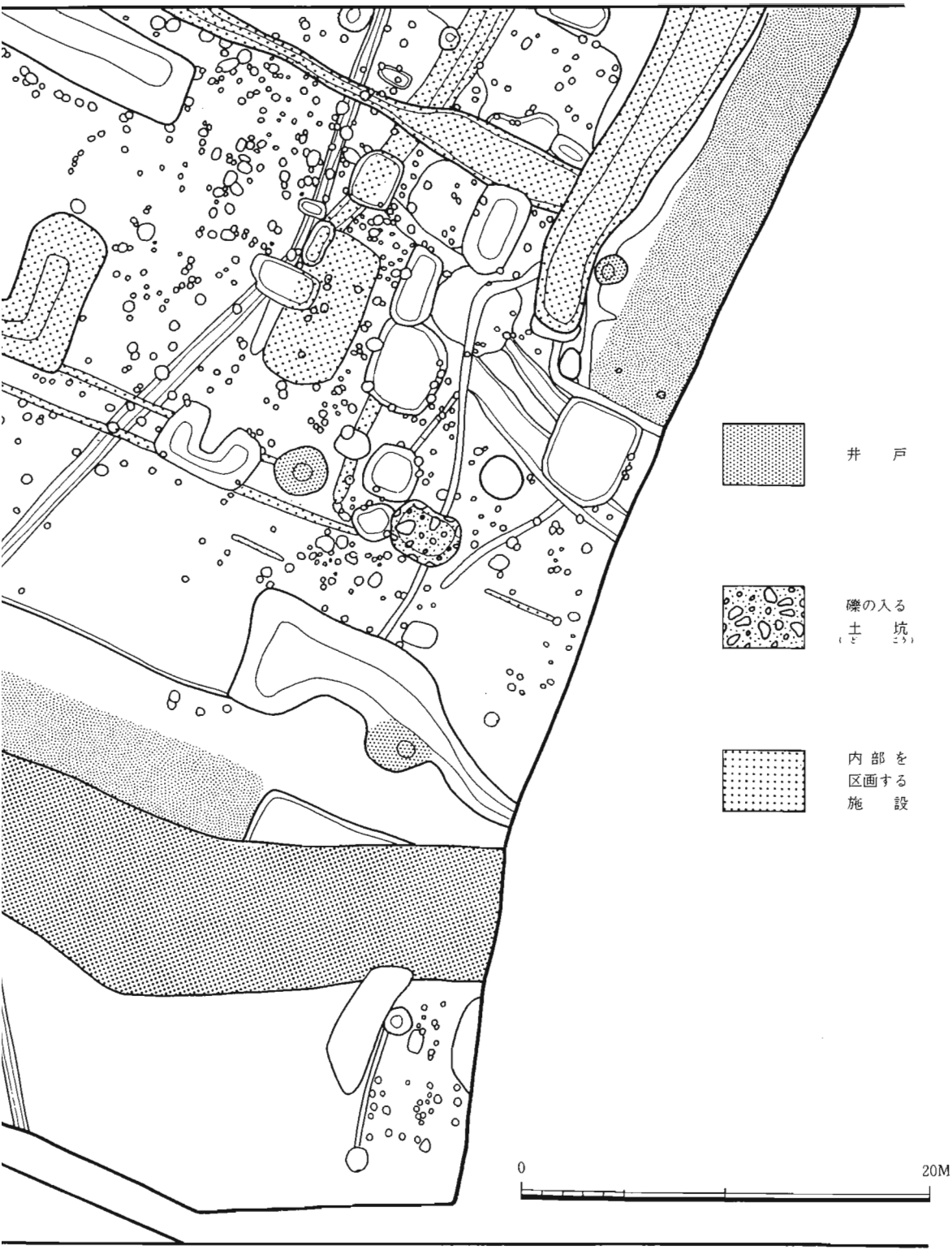
土坑の中には焼けた土、鉄や銅を溶かす際に出るカス、鋳型のかけらなどが多く埋まっているものもあります。また、良い粘土があるため、鋳型を作るための粘土を取ったと思われる穴もあります。中世の河内鋳物師に関連のある施設かもしれませんが、狭い範囲内のことなので、はっきりしたことはわかりません。



調査区略図



城館平面図


井　戸
礫の入る
土　坑
（ど　こう）
内部を
区画する
施　設
0
20M

城館跡

今回、（その１）調査区の中央部にあたるＢ地区で南北朝時代の城館跡が検出されました。

調査区の東側には、現在水路となっている小さな谷があり、西側では今は埋まっていますが、以前の調査で浅い谷がみられることから、城館跡は小さな台地の上にあるといえます。瓦器（低い温度でいぶし焼きされた軟質の土器で、11世紀中頃～14世紀代まで畿内で多く作られました）や土師器（赤褐色の素焼きの土器）、土製の釜，鉢，瓦などが出土しています。土器などの時期はほぼ14世紀代におさまるようで、古いものや新しいものはほとんどみられません。中央部を南北方向に横切る溝は古墳時代のものと思われますが、それ以外の柱穴や井戸，溝，土器や石などを捨てた土坑などは、いずれも14世紀代のものと考えられます。

調査区を大きくＬ字状に区画する堀は、幅約７ｍ，深さが約1.5ｍあります。堀の底に粘土層が厚く堆積していたことから、水が流れていた水路というよりも、かなりの水が溜まっていたようです。出入口付近にこの大きな堀をまたぐ橋があったはずですが、橋脚の痕跡などはみつかりませんでした。調査区以外のところに出入口があったのでしょうか。堀のすぐ内側には柱穴や土坑などがみられないため、堀を掘って出た土でこの部分に土塁を築いていたと考えられます。

堀で区画された内部に、さらに建物を明確に区画する溝がみつかっており、この中に城館の中で中心的役割をもつ建物があったと考えられます。また、この溝で囲まれた建物の東側にはおびただしい数の柱穴がみつかっており、何度も掘立柱建物が建て替えられたことを物語っています。たび重なる戦乱で焼かれたり、こわされたのでしょうか。柱穴の中に焼けた土や炭の破片が残っているものもあります。柱穴の底に石や瓦などを敷いたものも多く、基礎はかなりしっかりしています。掘立柱建物の復原はまだできていませんので、何棟の建物があったのかはわかりませんが、建物などの施設をつくる際にある程度の規格性があったようです。

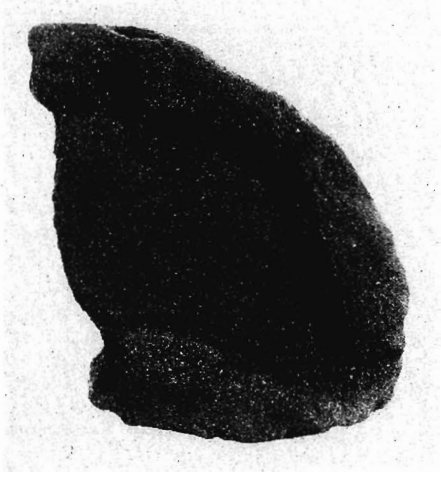
今回の調査で検出された部分は、城館のおよそ南半分ですので、全体の規模や構造が完全にわかったわけではありませんが、南北朝時代にこの地域で築造された城館の構造を知る上で貴重な資料となるでしょう。

城館内全景

建物群周辺

磬の鋳型

南北朝時代の城館跡が検出されたＢ地区の東約150ｍのＡ地区で出土したものです。遺物を含む層を掘削している際に偶然みつけたもので、時期やどのような施設に伴うものかは、まだはっきりしません。ただ出土した地点のまわりから検出された土器などから、中世のものと考えてよいと思われます。まだ発掘調査の途中なので、具体的なことはわかりませんが、柱穴や土坑が検出されているため、付近で鋳造関係の施設がみつかる可能性があります。



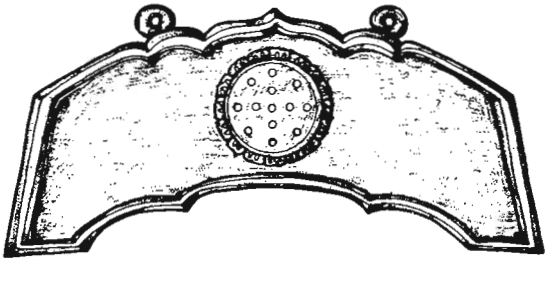
磬の鋳型

鋳型はかなり丁寧に作られており、全体の約1/3が残っています。比較的良い状態で残っているため、鋳型を合わせる時の合わせ目までわかります。表面か裏面かは不明ですが、縁の部分はしっかりしており、文様はみられません。下の図は出土した鋳型から推定復元した磬の図です。磬の鋳型は、現在のところ太宰府市で出土しているだけで、非常に珍しい発見といえます。

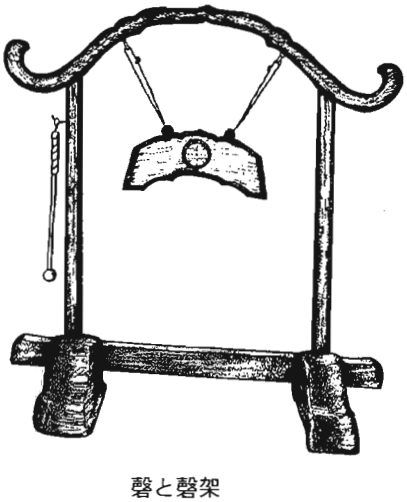
磬というのは、元々中国の古い楽器でした。日本では正倉院に現在まで伝わったものがあり、８世紀にすでに鋳造されていたという記録もあります。

仏具の一種で、仏堂内において導師の右脇机の上に置かれるのが普通です。形は左右対称の山形のものがほとんどです。銅や鉄の鋳造製で、山形の中央に撞座があり、上縁に鈕孔が２個あります。下図のように磬架と呼ばれる道具につりさげて、打ち鳴らすものです。

平安時代から鎌倉時代初期にかけては、鏡作り職人が磬を製造していたようで、片面式の小型の磬がみられます。一般に、古い磬は素文で片面，山形が直線的ですが、やがて両面となり、上下の線に曲線が加わります。普通は、孔雀が撞座をはさんで相対する文様ですが、稀に蓮華文，宝塔文，蝶形，蓮華形などもあります。太宰府市では、蝶形磬の鋳型がみつかっています。



磬の復原図



磬と磬架

時代	年代	主な出来事
鎌倉時代 12世紀	一一九二	源頼朝、鎌倉幕府を開く
鎌倉時代 13世紀	一一一九	源実朝が殺され、源氏滅ぶ
	一一二一	承久の乱おきる
	一一二四	親鸞、「教行信証」を著す
	一一二七	道元が帰国し、曹洞宗を広める
	一一三二	御成敗式目を制定
	一一五三	日蓮が日蓮宗を開く
	一一七四	文永の役 ［寇元］
	一一八一	弘安の役
	一一九七	永仁の徳政令が出る
	一三一七	幕府が両統迭立を朝廷に提案（文保の和談）
	一三二四	正中の変おきる
	一三三一	元弘の変おきる
	一三三三	鎌倉幕府滅ぶ　建武の新政始まる
	一三三五	足利尊氏謀叛する
	一三三六	湊川の戦い　後醍醐天皇、吉野に南朝を開く
	一三三八	足利尊氏、征夷大将軍となる
南北朝時代 14世紀	一三四七	四条畷の戦い
	一三五〇	観応の擾乱始まる
	一三七一	「太平記」が書かれる
	一三九一	明徳の乱おきる
	一三九二	南北朝の合一
	一三九七	金閣寺建立
	一三九九	応永の乱おきる
	一四〇四	明と勘合貿易始まる
室町時代 15世紀	一四二八	正長の土一揆おきる
	一四四一	嘉吉の乱おきる
	一四六七	応仁の乱おきる

まとめ

城というと、普通は大坂城や姫路城のような大きなものというイメージがありますが、現在残っている城のほとんどは、戦国時代（特に織田信長が登場してから以降）に築かれたり、後に改修されたものです。一般的に、鎌倉時代は館（やかた）の時代、南北朝時代は高い山城（やまじろ）の時代、室町・戦国時代は低い山城が主流になった時代です。今回検出された城館は、館（やかた）から山城に移る時代のものといえます。当時の代表的な城（山城）は、楠木正成が築いた赤坂城や千早城です。

今回、南北朝時代の城館跡が検出された調査区は、ちょうど小字名で「城ノ山」と呼ばれる地域にあたります。また、付近には隣接して「城ノ西」，「城ノ前」という小字名も残っています。この地域は、南北に走る下高野街道と東西に走る富田林街道の交差点で、交通の要所と考えられます。下高野街道に沿って南約２㎞の北野田付近では野田城が、北約800ｍの大饗には城岸寺城（大饗城）があって、いずれも南北朝時代の記録にでてきます。

野田城，延元３(1338)年　南朝方の高木遠盛が攻撃を加える　〔高木遠盛軍忠状〕

大饗城，正平６(1351)年　南朝方の和田助氏が攻撃を加える　〔和田助氏軍忠状〕

今回検出された城館の記録は現在のところ残っていませんが、『日本城郭大系』で紹介されている「余部城」の可能性が強いといえます。野田城や大饗城と同時期にあったことは確かで、狭山池の北岸にあって、記録にしばしば登場する池尻城から下高野街道沿いに造られた、南朝方の拠点の一つと考えることができるでしょう。